

令和元年6月19日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01750

研究課題名(和文) 幼児期の自律的自己制御への動機づけを育む養育者と保育者のモニタリング

研究課題名(英文) The Monitoring of parents and teachers who foster children's motivation for effortful control in early childhood

研究代表者

内海 緒香 (Utsumi, Shoka)

お茶の水女子大学・人間発達教育科学研究所・特任講師

研究者番号：60735306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、Dishion and McMahon (1998)のモニタリング概念に焦点を当て、日本の養育と保育への応用可能性を検討し、自己決定理論の枠組みからモニタリングが子どもの自律的自己制御へとつながるプロセスモデルを構築した。質的調査と量的調査により、モニタリングにおける、大人と子どものコミュニケーション的なプロセス、能動的(enactive)な性質、情緒的応答性との関連、家庭におけるモニタリングとECの相乗的相互作用、家庭における子どもの内発的動機づけを通じたECへの間接的関連と直接的関連、保育の場における内発的動機づけを通じたECへの間接的関連が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前方向的縦断研究を用い、大人のモニタリングと子どもの自己制御との因果関係を検証し、相互作用を明らかにすることができた。大人が受容的な態度でモニタリングを行い子どもの行為を理解し、子どもの自己決定に基づいた自律の支援につなげようとするのが、子どもの動機づけを高めるとともに自己制御の発達に影響を与える可能性が示唆された。モニタリングに関する海外の研究結果と同じように、本研究で明らかにされた要因の効果は、家庭に対する保育支援や、幼稚園、保育園、民間の保育サービスでの保育の質を確保する取り組みに応用することができると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the concept of “monitoring” in the socialization research of Dishion and McMahon (1998), examined the possibility of its application to parenting and child education and care in Japan, and developed a monitoring process model related to children's effortful control (EC) from the framework of self-determination theory. The mixed research methods combining qualitative and quantitative surveys revealed the following: 1) the communication process between adults and children embedded in monitoring, 2) its enactive rather than reactive nature, 3) its relationship with adults' emotional warmth, 4) synergistic interaction between parental monitoring and EC, and 5) indirect and direct links of parental monitoring to EC through the child's intrinsic motivation in the home, and indirect connection of teachers' monitoring to EC through intrinsic motivation.

研究分野：幼児教育・保育、人間発達教育心理学

キーワード：親子関係 子育て 見守り 保育実践 エフォートフル・コントロール 養育 可視化 自己決定性理論

1. 研究開始当初の背景

アメリカの国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）が行った長期追跡縦断調査の結果、発達早期の家庭内外における保育養育の質は、その後の子どもの適応や自己制御能力に影響することがわかっている。我が国でも将来の人材育成は国の成長戦略の一環であるとの認識から、義務教育前への投資に関する関心は高まっているが、我が国の保育や家庭の場に置いて応用可能な具体的知見はまだ明らかにされていない。欧米の社会化や心理学研究における重要な養育概念の中に“モニタリング（parental monitoring）”がある。モニタリングは、“子どもの居場所、活動や適応を追跡し注意を払うことを含む一連の養育行動”（Dishion & McMahon, 1998）と概念定義され、親子の肯定的な関係性を中核とし大人の価値信念や行動管理と関連性を持ちながら、子どもの社会的・心理的・行動的適応を高めることにつながると理論化されている。これまでのモニタリング研究の多くは青年期を対象としているが、日本においても先行研究とほぼ同じ結果が出されている（内海, 2012 など）。モニタリングには子どもを顕在的・潜在的危険から守る大人の意図が反映されていることから、幼児期の家庭のみならず、保育においても応用可能であると考えられる。さらに、青年期を対象とした研究の結果から、モニタリングと適応を結びつける機序として自己制御能力の発達が推測される。しかし、モニタリングを幼児期の家庭や保育の文脈に位置づけるためには以下の課題がある。(1) “保育の質”を研究する際、文化を超えた研究結果をそのまま我が国に適用できるかどうかの交差妥当性が問題とされた（秋田・佐川, 2012）。加えて、その他の構成概念に関わる妥当性を確認しなければならない。(2) 子どもの自己制御に対する保護者と保育者のモニタリングの影響を調べるにはモデルの構築と関連を説明する理論が必要となる。さらに、大人のモニタリングと子どもの自己制御能力との間の因果関係を検証する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、はじめに、保育の場でのモニタリングの構成概念妥当性について検討する。保育者のモニタリング行動の実態、すなわち、子どもの安全を守るためどのような養育保育実践を行っているかについてはモニタリング行動の生じる文脈を観察し質的な分析を行う。同時にモニタリングに関連した「見えない教育」に相当する潜在的な現象について調べる。モニタリング行動には、養育者や保育者のどのような価値観や信念が反映されているか明らかにする。

(2) 次に子どもの適応との関連およびそのプロセスについて理論モデルを作成し検証する。本研究は、自律的な自己統制に至るまでのプロセスを説明するには、これまでのモニタリング研究が依拠してきた学習理論だけでは不十分であると考え、自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）の枠組みから、モニタリング行動のプロセスを明らかにする。自己決定理論は、代表的には学習の動機づけで知られるが、家庭や保育の場の社会化プロセスにおける動機づけや動機づけを育む自律性支援の役割を明らかにしてきた。自己決定理論に基づき、本研究の基礎的研究により特定された保育者の保育実践と親のモニタリング、保育と家庭での自律性支援、子どもの内発的動機づけの要因を組み込んだ自己制御を予測するモデルを作成する。

3. 研究の方法

【調査 1】 保育者が子どもを保育するうえでどのようにモニタリングを行いどのような点に配慮しているか 4 歳児学級担任である幼稚園教師 5 名を対象に半構造化面接調査と質問紙調査を実施した。職務歴は 2-7 年、年齢 22-29 歳である。調査内容：保育者が幼稚園で園児の健康や安全を守るため注意し行動している点、具体的にどのような状況や出来事が危ないと認識しているか、またそれに対する取り組みや配慮について、一日の生活区分と園施設内の場所ごとに尋ねた。言語データについて質的内容分析（Berelson, 1952）を実施し、モニタリングに関連する分類スキームを作成した。

【調査 2】 保育の場面でのモニタリングにはどのような保育実践が伴うか具体的な文脈と行動間の関連を調べるため、幼稚園 6 園の 4 歳児学級を対象に非参与観察を実施した。延べ 12 日間の相互作用を中心としたエピソード、時間帯（午

前、昼食、午後)および場所(教室、園庭、その他)を記録した。調査1で作成したスキームをもとに、行動サンプルとしてのオープンコードを分類しカテゴリーを抽出した後、それぞれのカテゴリーの関連について検討した。

【調査3】 自律的自己制御 (Effortful Control; EC) の測定方法と妥当性を検討するため、母子28組に対し、発達検査、面接調査、質問紙調査を実施した。子ども(女児14名 ($M=4.93$, $SD=0.43$), 男児14名 ($M=4.99$, $SD=0.27$))を対象に、2種類のEC課題 (Family Study Effortful Control Batteries (©Grazyna Kochanska)) と心の理論発達テストを実施した。親子については、パズルを用いた相互作用の行動観察、クイズ形式によるモニタリングの測定を行った。最後に、母親に対しモニタリングに関する半構造化面接(質問内容は調査1を家庭向けに編集)を行った。質問紙測定 of EC (Kusanagi (1993) の CBQ Short Form (Putnam & Rothbart, 2006) 日本語翻訳「子どもの行動調査票」)、および妥当性を確認するための、子どもの適応 (SDQ; Goodman, 2000)、子どもの発達(津守式乳幼児精神発達質問紙)、母親のパーソナリティ(主要5因子性格検査; 村上・村上, 1997)、母親の養育 (PAS; 内海, 2013) については、保護者に事前に記入してもらい当日回収した。

【調査4】 保育には、本研究で取り上げたモニタリング概念に類似した“見守り”という用語がある。国内外で議論されてきた保育と家庭における大人と子どもとの間の暗黙的なかわりを整理し、モニタリングと見守りの性質の違いについて考察するため、見守りに関連する5つの議論(改訂幼稚園教育要領(2018)、Hayashi & Tobin(2014)、中坪(2016)、唐澤・平林(2013)、Bamba (2009))を比較検討した。

【調査5】 調査1と2で得られた項目内容をもとに、「園内の安全安心を守り育む保育実践尺度」を作成するため、インターネット調査会社の登録モニターを利用した調査を行った。調査時点で保育士・幼稚園教諭・保育教諭の現職にあり、幼児クラスを担当したことのあるモニター350名(女性91%)を分析対象とした。対象者の年齢は $M=38.94$ ($SD=11.01$)、勤務先は、保育園64.3%、幼稚園11.7%、こども園11.7%、小規模/家庭的保育5.7% その他6.6%である。使用尺度:「ことばかけ」「確認」「構造化」各10項目、「見守り」「連携」各8項目、「報告」5項目、合計51項目(「ほとんど行わない」から「いつも行う」までの4件法)。他に弁別的収束の妥当性を測定するために、モニタリングと受容(内海, 2013)、開放性(主要5因子性格検査; 村上・村上, 1997)を用いた。

【調査6】 モニタリングおよびその他の養育、子どもの内発的動機づけ、自己制御との関連プロセスや、モニタリングと自己制御との間の因果関係を調べるため、調査会社に事前に登録しているモニターの中からスクリーニングにより縦断パネル(幼児教育保育施設3歳/4歳クラスに通う子どもを持つ父親400名(男児200名・女児200名)母親400名(男児200名・女児200名))を作成し半年を置いて2回の調査を行った。分析対象者は2回の調査に参加した保護者455名((父親223名 ($M=39.92$; $SD=4.87$), 母親232名 ($M=35.13$; $SD=4.74$); 男児221名 ($M=4.12$; $SD=0.57$), 女児234名 ($M=4.11$; $SD=0.52$))であった。使用尺度は、モニタリング(内海, 2013)・過去(0~2歳の時)の足場かけ・自律性支援・子どもの自己制御 (EC; CBQ Short Form; Putnam & Rothbart, (2006))であった。

【調査7】 養育者と保育者のモニタリング、子どもの内発的動機づけ、自己制御との関連プロセスを調べるため、首都圏の保育教育施設(幼稚園・保育所・こども園)27園の管理職、3歳児学級~5歳児学級担任の保育者と担任学級に在籍する園児の保護者合計約1500名を対象とし、半年を置いて3回の質問紙調査を実施した。管理職と担任保育者は質問紙、保護者に対するアンケートは、ウェブ・フォームか質問紙で回答する形で実施し、紙媒体の質問紙は郵送で回収した。第1回目調査の回収数は、管理職25名、保育者77名、保護者561名であった。3つのデータで対応の取れた464ケース(父親19名 ($M=42.21$; $SD=6.46$), 母親417名 ($M=38.65$; $SD=4.48$), 続柄不明10名 ($M=38.50$; $SD=5.48$); 男児221名 ($M=5.31$; $SD=0.87$), 女児237名 ($M=5.45$; $SD=0.90$))を分析対象とした。管理者用項目尺度は、保育施設タイプ・職員数・園児数・保育標準時間・屋外で過ごす時間の長さ・園庭の有無であった。保育者用項目尺度は、回答者の属性・免許/資格・保育経験年数・担任学級の園児数・担任学級の配置保育者数・保育実践尺度・モ

ニタリング (内海, 2013)・自律性支援・モダニティ・保育者バーンアウトであった。保護者用項目尺度は、回答者の属性・暮らし向き・子育て不安・パーソナリティ (The Mini-IPIP Scales; Donnellan, et al., 2006)・モニタリング (内海, 2013)・過去の足場かけ・自律性支援・子どもの属性・EC (Putnam & Rothbart, 2006)・適応 (Goodman, 2000)・内発的動機づけであった。

4. 研究成果

(1) 保育の場でのモニタリングとモニタリングに関連する保育実践の同定 (調査1と2)

オープンコード数は全体で 143 であり、6 種類の焦点コードに分類された。〈確認〉は、例えば朝の視診や身支度の確認のように、保育場面におけるルーティン化した行動であった。〈留意〉は、園児の安全・健康・適応に向けた様々な配慮や諸注意事項であった。〈構造化〉は園児の安全・健康を守るため園児の取り巻く環境を秩序づけることであった。〈見守り〉は、工作中怪我が起こりやすいので気をつけて見ているといったように保育者がある意図のもとに成り行きを観察することであった。〈ことばかけ〉は、手洗いやトイレ排泄への促しや危険行為への注意であった。〈連携〉は他の保育者に声をかけて協力してもらうなど戸外や保育室における保育者間の連携や情報共有であった。〈連携〉以外の 5 つの概念カテゴリーには全ての保育者の報告が該当した。〈留意〉を除いた保育行動カテゴリー 5 種類と各サブカテゴリーを分類スキームとした。

観察エピソードの内容分析により、保育者の報告から作成した分類スキームのカテゴリー〈ことばかけ〉〈確認〉〈構造化〉〈見守り〉〈連携〉に〈報告〉を加えた 6 カテゴリーが得られた。保育者の〈確認〉〈構造化〉〈見守り〉から園児に対する〈ことばかけ〉へのつながり、保育者の〈確認〉に対応した園児からの〈報告〉、そしてこれらの行動を支える園内の〈連携〉というモニタリングプロセスが示された。さらに、モニタリング行動の頻度は、園の構造的特徴、時間帯、活動場所によりばらつきがあることが明らかとなった。幼稚園におけるモニタリングは、静的な見張りや監視というよりも保育者と子どもたちとの間の協働的な性質を持ち、モニタリングプロセスにおける保育者との相互作用を通じて子どもたちの慎重さや自己管理が育まれる可能性が示唆された。

(2) 自己制御を測定する方法の検討 (調査3)

分布の形状を確認したところ EC を測定する昼夜課題の分布は天井効果を示し、描円課題では外れ値が複数みられた。EC 課題の得点、CBQ 尺度得点、SDQ 尺度得点、発達の各項目について平均値と標準偏差を求めた。性差の分析では、EC、運動、探索において女兒の値が男児の値を有意に上回っており、先行研究 (例えば松永, 2008) の結果と同様に幼児期の自己制御能力には性差があることが示された。相関係数からは EC 課題と SDQ 尺度得点、発達の各項目との間に有意な関連は認められなかった。質問紙測定 of EC は、外在化問題と負の関連、向社会行動および言語発達と正の関連がみられた。以上の結果から、4・5 歳児の EC 測定をする場合、質問紙 (母親の報告) による測定にはある程度の妥当性が示された。一方、検査法では課題の選択と実施方法における問題点の把握の必要性が示唆された。

(3) “見守り”に関する文化的考察 (調査4)

保育の場と家庭に共通して、察しを待つ“見守り”と子ども理解の“見守り”の 2 種類を指摘した。待つ“見守り”とは、文脈に注意を払う日本文化を基盤とし、子どもに他者への思いやりや大人の意図への察しを求め、子どもの状況判断の自立を意図した reactive な“見守り”である。他方、子ども理解のための“見守り”とは、大人が子どもの環境に配慮するとともに子どもの行為の意図を探り次の支援につなげようとする proactive な“見守り”である。本研究では後者の保育の場での proactive な“見守り”実践を取り上げる。

(4) 「園内の安全安心を守り育む保育実践尺度」の作成 (調査5)

主因子法による探索的因子分析 (プロマックス回転) を行った。ガットマン基準と寄与率 50~60%以上を勘案した結果 7 因子が妥当であると判断した。第 1 因子から順に、「見守り」(10 項目)、「ことばかけ」(10 項目)、「園児の報

告」(5項目)、「連携：情報共有」(4項目)、「食事の確認」(3項目)、「連携：役割分担」(4項目)、「構造化」(4項目)と解釈した。因子間相関を確認すると、すべての因子間で弱から中程度の関連が認められた。クロンバックの α 係数は、.67から.91とまずまずの値であった。保育者のモニタリングと保育実践の下位尺度は、全て1%水準で中程度に有意な相関を示した。特に「見守り」や保育者間の「情報共有」との値が高かった。

(5) 家庭におけるモニタリングと子どもの自己制御との間の相乗的相互作用 (調査6)

1時点目に測定した過去の足場かけおよびモニタリングから、それぞれ自律性支援と内発的動機づけを通り、2時点目に測定した自己制御に至るモデルを仮定し、構造方程式モデリングによるパス解析を実施した。1時点目に測定したモニタリングと過去の足場づくりは共に自律性支援・内発的動機づけと有意な正の関連を示した。1時点目の内発的動機づけと自律性支援は2時点目の自己制御と有意な正の関連を示し、さらに、1時点目の過去の足場作りとモニタリングは2時点目の実行機能と直接関連していた。モニタリングと自己制御との関係性を調べるため、交差遅延効果モデルと同時効果モデルを検証したところ、どちらも原因となり結果となる相乗的相互作用が認められた。

(6) 家庭と保育のモニタリングが子どもの自己制御につながるプロセスの同定 (調査7)

因子分析の結果、自律性支援の項目から「共感的支援」「情報評価的支援」の2因子が抽出された。家庭の要因(過去の養育・モニタリング・共感的支援・情報評価支援)と保育の要因(見守り・モニタリング・共感的支援・情報評価支援)両方から内発的動機づけを通じて自己制御へと至るモデルを仮定し、構造方程式モデリングによるパス解析を実施した。過去の足場かけとモニタリングは直接自己制御と正の関連を示した。過去の足場かけは情報評価的支援と正の関連を示し、モニタリングは共感的支援と情報評価的支援と正の関連を示した。共感的支援は、子どもの動機づけに関連し、動機づけは自己制御と正の関連を示した。保育者の見守りとモニタリングはそれぞれ保育者の共感的支援と情報評価的支援と正の関連を示したが、子どもの動機づけと関連を示したのは共感的支援のみであった。

総合考察

本研究は、モニタリングと自己制御との関連を自己決定理論により説明できることを示した。さらに、シンボル機能への働きかけとなる過去の足場かけ・モニタリング・自律性支援と子どもの内発的動機づけや自己制御の間の異なった関連性を見出した。自己制御の発達には、よくモニタリングすることの他に、3歳より前の言語やイメージなど表象機能への働きかけが重要と示唆された。保育の側においても先を見越した支援としての見守り実践とモニタリングは自律性支援と関連を持つこと、特に、情緒的共感的な自律性支援は、園児の自己制御に向けた内発的動機づけを高めるのに有効であることを示唆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 内海 緒香, 子どもの健康・安全・適応を育む保育の場における見守りプロセスの検討, 人文科学研究 15 巻, 2019, pp.89-103 <http://hdl.handle.net/10083/00063271> 査読有り
- ② 内海 緒香, 子どもの健康・安全・適応はどのようにモニタリングされているのか: 幼稚園教師の語りの質的内容分析, 人文科学研究 14 巻, 2018, pp.121-132 <http://hdl.handle.net/10083/00062209> 査読有り

〔学会発表〕(計12件)

- ① 内海 緒香, 平成31年3月11日 日本発達心理学会 第30回大会 東京 早稲田大学 幼児期の養育とCool/Hot 実行機能との関連: 自己決定理論を媒介としたモデルの検討
- ② Putnam S., Alexander A., Zweig A., Ellis A., Lipina S., Ruetti E., Segretin M., Castillo K., Ison M., Greco C., Jensen L., Conte E., Akhter S., Urbain-Gauthier N., Gillet S., Galdiolo S., Roskam I., Warreyn P., Loop L., … Utsumi S., …

Olazabal, D. et. al. (2019) Cultural influences on temperament development: Findings from the Global Temperament Project. March 21, 2019 the 2019 SRCD Biennial Meeting, Baltimore, Maryland, USA.

- ③ 内海 緒香, 平成 30 年 9 月 17 日 日本教育心理学会 第 60 回総会 東京 慶応大学 幼児期の父親と母親の育児不安に関連する個人・家庭・園要因の検討
- ④ 内海 緒香, 平成 29 年 10 月 21 日 第 14 回子ども学会議 岡山 環太平洋大学 乳幼児期のエフォートフル・コントロールに関する考察: 保育実践への発展
- ⑤ 内海 緒香, 平成 30 年 3 月 24 日 日本発達心理学会 第 29 回大会 仙台 東北大学 保育の場におけるモニタリング尺度の開発
- ⑥ 内海 緒香, 平成 30 年 3 月 21 日 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所平成 29 年度研究成果報告会 東京 お茶の水女子大学 保育の質を測定するみまもり尺度の開発,
- ⑦ 内海 緒香, 平成 29 年 10 月 8 日 日本教育心理学会第 59 回総会 名古屋 名古屋国際会議場 母親のパーソナリティ, 養育と幼児の気質との関連—子どもの困難度に焦点を当てて—
- ⑧ 内海 緒香, 平成 29 年 3 月 26 日 発達心理学会第 28 回大会 広島 広島国際会議場 エフォートフル・コントロールの測定—4・5 歳児を対象として
- ⑨ 内海 緒香, 平成 29 年 5 月 20 日 日本保育学会第 70 回大会 岡山 川崎医療福祉大学 保育の場におけるモニタリング—幼稚園教師の配慮に関する内容分析—
- ⑩ 内海 緒香, 平成 28 年 10 月 8 日 子ども学会議 第 13 回大会 浜松 静岡大学 健康/安全を守る環境としての幼児期のモニタリングに関する保育実践活動
- ⑪ UTSUMI Shoka, Preschool teachers' practices of monitoring children to prevent health risks and facilitate adaptation: Multi-method triangulation in a qualitative study. The 31st International Congress of Psychology 2016, 2016.7.28, Pacifico Yokohama, Yokohama
- ⑫ 内海 緒香, 平成 27 年 9 月 22 日 日本心理学会 79 回大会 名古屋市 名古屋国際会議場 園生活における保育者の幼児に関するモニタリング—保育者は子どもの健康・安全・適応をどのようにモニタリングしているか—,

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www-p.cf.ocha.ac.jp/iehd-utsumi/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

(2) 研究協力者 なし